

プレスリリース

生誕 135 年 愛しのマン・レイ

Man Ray of Our Affections

An Exhibition Celebrating the 135th Anniversary of His Birth

東京富士美術館では、2025 年 1 月 11 日(土)より 3 月 23 日(日)まで、「生誕 135 年 愛しのマン・レイ」展を開催します。

マン・レイ(1890-1976)は、画家、写真家、オブジェ作家、映像作家という多彩な顔を持ったマルチアーティストでした。そして、マン・レイは、彼が時代をともにしたシュルレアリストの画家や詩人は元より、社交界で知り合った貴族や名士、はたまた自身の恋人や友人の妻など多くの個性的な女性たちとも広く交友関係を結んだ、陽気で憎めない人柄の持ち主でもありました。

本展では、当館が所蔵するマン・レイのコレクションに、マン・レイの最期の愛妻ジュリエットとも生前交友し、日本における無類のマン・レイ蒐集家また研究家として知られる石原輝雄氏が所蔵する作品と、マン・レイに関する膨大なアーカイブ資料を加えて、マン・レイが生きた世界や周辺の間人模様など、その足跡を追いながら彼の愛すべき人間性を探ります。2 度にわたる大戦が世界に影を落とす中で、独創的かつ愉快な作品群を残し、時代を生き抜いたマン・レイ。戦争がもたらした「分断の時代」を超克するかのような、ウィットに富んだ作品と彼の人となりを感じ取っていただけたら幸いです。

愛しのマン・レイ
生誕135年

MAN RAY OF OUR AFFECTIONS
An Exhibition Celebrating the 135th Anniversary of His Birth

2025 **1.11 土** > **3.23 日** 2/17(月)に
展示替えを行います

休 館 日：月曜日 ※1/13(月祝)・2/24(月祝)は開館、1/14(火)・2/25(火)は休館

開館時間：10:00～17:00 (16:30 受付終了)

主 催：東京富士美術館 後 援：八王子市、八王子市教育委員会

学術監修：フランシス・M. ナウマン (ダダ・シュルレアリスム、博士)



マン・レイ「セルフポートレート」1942年 東京富士美術館蔵

◆開催概要

展覧会名： 生誕 135 年 愛しのマン・レイ
Man Ray of Our Affections:
An Exhibition Celebrating the 135th Anniversary of His Birth

会 場： 東京富士美術館 本館 企画展示室
〒192-0016 東京都八王子市谷野町 492-1
TEL.042-691-4511

会 期： 2025(令和 7)年 1 月 11 日(土)～3 月 23 日(日)

休館日： 毎週月曜日、1 月 14 日(火)、2 月 25 日(火)、
(1 月 13 日、2 月 24 日は開館)

開館時間： 10:00～17:00(16:30 受付終了)

入場料金： 大人 1,500(1,200)円、大高生 900(800)円、
中小生 500(400)円、未就学児無料
※新館常設展示室もご覧になれます
※()内は各種割引料金 [20 名以上の団体、65 歳以上
の方、当館公式 SNS 登録者ほか]
※土曜日は中小生無料
※障がい児者、付添者 1 名は通常料金の半額 [証明書を
ご提示ください]

主 催： 東京富士美術館

後 援： 八王子市、八王子市教育委員会

問い合わせ先：企画広報課 TEL.042-691-4511 FAX.042-691-4623
E-mail: toiawase@fujibi.or.jp

◆展示構成

〈第1章〉 ニューヨーク⇒リッジフィールド時代(1906-1920)

マン・レイは 1890 年 8 月 27 日、フィラデルフィアに生まれ、ニューヨークで育ちました。高校卒業後、フェレル・センターで絵を習うとともに、1913 年 2 月に開催された「アーモリー・ショー」や、写真家アルフレッド・スティーグリッツが経営する 291 画廊で行われる展覧会に触れ、半ば独学で絵画制作に取り組みます。

1913 年春からはニューヨーク郊外のリッジフィールドで友人たちとの共同生活を始め、そこで女性詩人で最初の妻となるアドン・ラクロワや生涯の盟友マルセル・デュシャンとの出会いも果たします。

1915 年 10 月、ダニエル画廊で初めての個展を開催するなど、アーティストとしての活動をスタートさせ、アエログラフなどの独自の描法にも取り組みました。

そして、1921 年 4 月、デュシャンらと雑誌『ニューヨーク・ダダ』を発行した頃には名実ともにダダの仲間入りを果たし、いよいよアーティストとして頭角を現し始めます。

主な出品作品：



左：《ゲイシャ・ガール》1906 年頃 東京富士美術館

中：《トーテム》1914 年 東京富士美術館

右：「マン・レイのドローイングと絵画展」(初個展)図録(ニューヨーク、ダニエル画廊)

1915 年 石原輝雄・純子コレクション



左：《スパニッシュ・ダンサー》 1918 年 東京富士美術館
中：《室内または静物+部屋》 1918 年 東京富士美術館
右：《イジドル・デュカスの謎》 1920 年 東京富士美術館

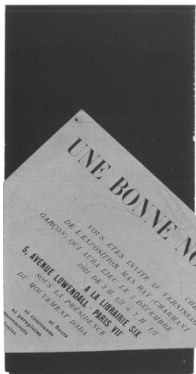
〈第2章〉 第1次パリ時代(1921-1940)

1921年7月、マン・レイはパリに渡ります。第1次大戦後の活気を取り戻しつつあったパリで、彼は異邦人の住処と化していたモンパルナスを拠点に、後に「シュルレアリスム」のグループを結成することとなる詩人のアンドレ・ブルトンやポール・エリュアール、画家のフランシス・ピカビアやマックス・エルンストをはじめ、ファッションデザイナーのポール・ポワレ、文学者のアーネスト・ヘミングウェイなど、文化人から富豪、貴族に至るまで多方面の人々と交友し、アーティストとして活動の幅を広げていきます。

パリでは多くの女性とのロマンスもありました。「モンパルナスの女王」といわれたキキ、リー・ミラー、アディとの恋愛や失恋の中で、《アングルのヴァイオリン》《破壊されるべきオブジェ》《天文台の時間—恋人たち》など、多くの傑作も生まれました。

また、この頃マン・レイは、写真の分野で大きく才能を開花させました。「レイヨグラフ」「ソラリゼーション」という新たな手法をとった写真作品は世間の注目を浴び、彼ならではの視点で撮られたポートレート写真やファッション写真も、パリにおける彼の大事な仕事のひとつでした。

主な出品作品：



1



2

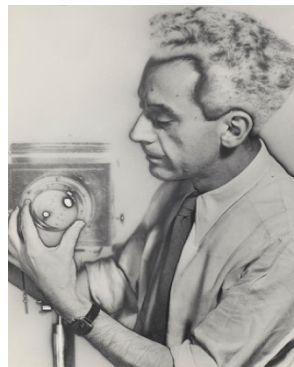


3



4

- 1：「ダダ、マン・レイ展」図録(パリ、シス書店)1921年 石原輝雄・純子コレクション
 2：《贈り物》1921/72年 東京富士美術館
 3：《アングルのヴァイオリン》1922/76年以降 東京富士美術館
 4：《破壊されないオブジェ》1923/75年 東京富士美術館



- 左：《天文台の時刻に-恋人たち》1932-34/65年 石原輝雄・純子コレクション
 中：《セルフ・ポートレート(ソラリゼーション)》1932/77年 東京富士美術館
 右：《ヴァランティーン・ユゴの肖像》1933年 石原輝雄・純子コレクション

〈第 3 章〉 ハリウッド時代(1940-1951)

第 2 次大戦の戦火を逃れるため、マン・レイは恋人のアディに別れを告げ、1940 年 8 月、故郷ニューヨークへ戻りました。故郷での生活に気乗りしなかったマン・レイは、友人の誘いに乗り、アメリカを横断する旅へ同行しました。そこで訪れたハリウッドで彼は生涯の伴侶となるジュリエット・ブラウナーと出会い、この地で 10 年余を過ごすことになります。1944 年 9 月にはサークル画廊で《ミスターナイフとミス・フォーク》をはじめとしたオブジェを「我が愛しのオブジェ」として発表し、1948 年 12 月にはコプリー画廊で個展「目立たずに続けるべきこと」を開催し、パリのポアンカレ研究所で撮影していた数学的オブジェの写真をもとに制作した「シェイクスピア風方程式」の絵画シリーズ 17 点を発表するなど、精力的に絵画・オブジェ制作に取り組みます。ハリウッドでのマン・レイは、写真を手がけることは少なく、絵画・オブジェの制作に加え、『大人のためのアルファベット』のような言葉と関連づけたデッサンをまとめた書籍の制作 など、写真以外の創作活動に没頭し、自らのアイデンティティを再確認することとなりました。

主な出品作品：



左：《ミスター・ナイフとミス・フォーク》 1944 年 東京富士美術館

中：《帽子と手袋のジュリエット》 1945 年頃 東京富士美術館

右：《チェス・セット》 1947 年 東京富士美術館



左：《ピラミッド》 1947 年 東京富士美術館

中：「マン・レイ個展（告知なしにありに続けるべきために）」案内状

（ロサンゼルス・コプリー画廊） 1948 年 石原輝雄・純子コレクション

右：『大人のためのアルファベット』 1948 年(初版) 東京富士美術館

〈第 4 章〉 第 2 次パリ時代(1951-1976)

1951 年 3 月、マン・レイはジュリエットを伴い、再びパリに渡り、モンパルナスのフェルー街にアトリエを構えました。彼は、自身に対する「進歩がない」との批評を物ともせず、新作を手がける一方で、自らのアイコンを流布するかのよう自作のリメイク作品を量産していきます。

1963 年 4 月に刊行した自伝『セルフ・ポートレート』も反響を呼びました。そして、1966 年 10 月にロサンゼルス・カウンティ美術館で 300 点を展示した大回顧展に代表されるように、欧米各地で毎年のように回顧展が開催されるようになりました。

現在に至るまで、定期的に彼の展覧会が開催され続けていることは、彼と彼のアイコンというべき作品がいつしか愛されるべき存在として認知されたことの証左とも言えるでしょう。

1976 年 11 月 18 日、マン・レイはジュリエットが見守る中、アトリエで静かにその生涯を閉じました。

主な出品作品：



1



2

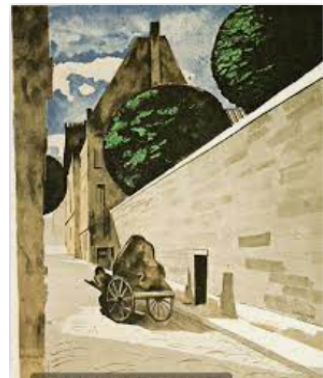


3



4

- 1：《フランスのバレエ》 1956/71 年 東京富士美術館
 2：《パン・パン（彩色パン）》 1958/66 年頃 東京富士美術館
 3：《コンポジション（黄+青）》 1960 年頃 東京富士美術館
 4：《イッツ・スプリングタイム》 1961/71 年 東京富士美術館



- 左：「マン・レイ」展ポスター(ロサンゼルス、カウンティ美術館) 1966 年
 石原輝雄・純子コレクション
 中：《ライナス・ポーリングへのオマージュ》 1943/70 年 東京富士美術館
 右：《フェルー街》 1974 年 石原輝雄・純子コレクション

◆出品作品概要

絵画（油彩・水彩・版画）約 60 点/ミクストメディア・オブジェ
約 30 点/写真 約 80 点/書籍 約 30 点/資料類 約 150 点

◆学術監修者略歴 フランシス・M・ナウマン/Francis M Naumann

フリーランスの学者、キュレーター。専門はダダおよびシュルレアリスム時代の美術。

著書には『ニューヨーク、ダダ 1915-25 年』（ハリー・N・エイブラムス、1994 年）や『マルセル・デュシャン:機械的な複製の時代における芸術の制作技法』（ルディオン・プレス、1999 年、ハリー・N・エイブラムス配給、ニューヨーク）等がある。「悪戯: ダダ、によるニューヨーク侵攻」展(ホイットニー美術館、1996 年)、「ベアトリス・ウッド」展(アメリカ工芸博物館、1997 年)、「モダニズムへの転換:マン・レイの初期作品」展(モントクレア美術館/ジョージア美術館/テラ美術館、2003-2004 年)等を企画。「デュシャン マン・レイ ピカビア」展(テート、2008 年)ではコンサルタントとして協力・執筆している。

◆関連イベント

[1] 石原輝雄氏(マン・レイ 蒐集家/研究家)×木水千里氏(フェリス女学院大学准教授)×宮川謙一(展覧会担当学芸員)によるトークセッション「愛しのマン・レイ」

[2] 「愛しのマン・レイ」展 開催記念 名曲コンサート（調整中）

[3] 担当学芸員によるギャラリートーク

※関連イベントの詳細につきましては今後ホームページ
www.fujibi.or.jpにてお知らせします

東京富士美術館について

当館は 1983 年 11 月、東京・八王子市に設立された総合的な美術館です。コレクションは日本・東洋西洋の各国、各時代の絵画・版画・写真・彫刻・陶磁・漆工・武具・刀剣・メダルなど様々なジャンルの作品約 30,000 点で形成されています。

「世界を語る美術館」を“永遠の指針”としてこれまで各国地域の優れた文化を新しい視点から紹介する海外文化交流特別展を国内外で活発に開催し、1990 年には日本の外務省より「外務大臣表彰」を受彰。2008 年には新館がオープンし、常設展示室ではルネサンスからバロック・ロココ・新古典主義・ロマン主義を経て、印象派・現代にまで至る西洋絵画 500 年の油彩画コレクションが一望できるようになりました。



この件に関するお問い合わせ先

問い合わせ先：企画広報課 TEL.042-691-4511 FAX.042-691-4623

E-mail: toiawase@fujibi.or.jp